

【出題のねらい】

問題文として、岩佐美代子「フリガナの文化」から一部中略しつつ全体を掲出した。筆者は、中世和歌文学を中心とする日本古典文学の研究者であるが、国立国会図書館の事業として索引作成に携わった経験をとおして、フリガナを「面白い言語の文化現象」と捉えたことを述べている。問一～問四は、古文の知識を含む、国語の基礎的な学力を確認する設題。問五の小論文では、筆者の感じている面白さ、「文化現象」の諸相を具体的に把握したうえで、「フリガナの文化」について考察したことを、具体例を示しながら筋の通ったわかりやすい文章で記述することを求めている。

【評価のポイント】

問一

漢字の読み、書きの問題。正確な完答に得点を与えた。

問二

品詞としての形容詞とその活用形について理解していることが前提となる。

問三

傍線部にある「かえって」がポイント。字面がむずかしくない方がむしろ問題になりやすいのはなぜなのかを答える。解答の要素として、容易に題名の読み方に思い至ることができるために、別の可能性を考えようとしないうち、あるいは思考を拘束されて疑いをもちにくい、といった説明が必要である。

問四

ここで言う「江戸文化の懐の深さ」とは、芝居の外題や書名に見られる「漢籍めかしたかたい字面としゃれのめしたよみとの不即不離、阿吽の呼吸の見事さ」である。筆者はそこに「かたい内容をやわらげて伝える啓蒙的役割」「やわらかい内容をかたい字面でカムフラージュするおかしみ」「なぞときやパロディの興趣」があると言い、「狂言作者の教養も大したもの」と感心している。これらを勘案して答案をまとめればよいであろう。

問五

筆者のいう「フリガナの文化」についての的確に把握したうえで、適切な具体例を明示し、考察したことを、筋の通った文章構成により論理的にわかりやすく述べているかがポイント。漢字、仮名遣いなどについて、表記の正確性も求められる。

【講評】

問一

漢字を書く問題にはおおかた正答していた。ただし、「徴兵」の「徴」や「随一」の「随」に誤りが散見された。「巷間（コウカン）」の読みは正答率が低かった。日ごろ本や新聞を読む折にも、意識して漢字を読み書きする力を養ってほしい。

問二

全体として正しく答えられている答案が多かった。ただし、終止形でなく、連用形を書いた答案が散見された。基本的なことをきちんと理解しておくことが大切である。

問三

傍線部の前段の内容に引きずられて、内容を見ずに読んでしまうといった記述が散見さ

れたが、ここでは近代小説に限らず字面が格別むずかしくない題名のことを話題にしているのであり、そのことを捉えられていない答案は減点した。また、点検の眼を免れてしまうこと自体が問題と捉えた答案が多くあった。点検の眼をも逃れてしまうほど誤りに気付きにくいことが問題だという文脈を押さえない。

問四

フリガナの文化について、筆者が「日本以外にも果たしてあるか否か」と慎重に述べているにも関わらず、「日本独自の文化（だから）」と大雑把に捉えた答案が散見された。まず文章の内容を正確に捉えることが大切である。

問五

「フリガナの文化」についての論述を求めているところ、「フリガナ」についての考察になっている答案が散見された。「フリガナの文化」と「フリガナ」との間には三文字の違いしかないが、文学部国文学科を志す以上、こうした言葉の差異には敏感に反応してほしい。さらに言えば、「フリガナの文化」について論じるにあたって、「そもそもフリガナとは何なのか」という問い直しを含むような考察が展開されていると理想的である。大学に入学して文学を学んでいく上でも、「フリガナ＝漢字の読み方を示すもの」といった「当たり前」を捉え直すような観点を持つことを大事にしてほしい。

関連して、例えば、以下のような理解は適切さを欠くと感じられ、適宜減点した。

- ・「フリガナ」の問題と漢字の読みの問題とを同一視している。
- ・「フリガナ」を専ら「当て字」のこととしている。

これらはそれぞれそのまま重なるものではないことに注意してほしい。

日本文化の独自性をいうために、西洋文化、西洋語、アルファベットなどを、引き合いに出す際に、誤解を含む答案があった（例えば、日本語には遊びや解釈の幅があるが、西洋語には画一的な意味しかないなど）。西洋語にも、文字と文字と、もしくは文字と音との関係性による複合的な表現は存在しているので、そうした理解の十分でない記述は減点とした。

なお、具体例として、マンガ文化に触れる答案があった。マンガ文化をとりあげた教育にも意義があるであろうと感じた。